

# Significance of pediatric nursing practice in which graduates of our university as a clinical nurses teach: From the results of questionnaire survey for students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 靖枝, 尾崎, 優子, 笹尾, 裕美, 高松, 邦彦, 中田, 康夫, SHOJI, Yasue, OZAKI, Yuko, SASAO, Hiromi, TAKAMATSU, Kunihiko, NAKATA, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.20608/00000969">https://doi.org/10.20608/00000969</a>

原著

# 卒業生の参加を取り入れた小児看護学演習の意義 ～質問紙調査の結果より～

庄司 靖枝<sup>1)</sup> 尾崎 優子<sup>1)</sup> 笹尾 裕美<sup>1)</sup>

高松 邦彦<sup>2)3)4)</sup> 中田 康夫<sup>1)</sup>

## Significance of pediatric nursing practice in which graduates of our university as a clinical nurses teach: From the results of questionnaire survey for students

Yasue SHOJI<sup>1)</sup>, Yuko OZAKI<sup>1)</sup>, Hiromi SASAO<sup>1)</sup>,  
Kunihiko TAKAMATSU<sup>2)3)4)</sup>, and Yasuo NAKATA<sup>1)</sup>

### 要旨

近年、医療を取り巻く社会の変化により医療職者に求められるニーズは高く、看護師の質の保証を考慮した看護教育が望まれている。特に、小児看護における教育環境として実習場所や実習時間の確保が難しく、実習内容の保証に苦慮し、教育の質の保証は困難を伴う。

一方、看護教育における臨床と教育の協同や連携の必要性が明らかになり、ユニフィケーションの取り組みが注目されている。そこで本学では、臨床の実習場面を想定し、臨床看護師の卒業生の参加を取り入れた演習を行った。

本研究は、卒業生参加型演習が看護学生にどのような影響をもたらすか明らかにするために、質問紙調査を行った。単純集計やその質問項目間の関係について可視化するため、ネットワーク解析を行った結果、学生は卒業生が参加することで看護師を身近に感じ、臨床看護のイメージがいたり、指導のなかで臨床との違いを体験したり、実習への動機づけになっていたことが明らかになった。

キーワード：卒業生、小児看護学演習、ユニフィケーション、連携

### SUMMARY

In recent years, the need for medical professionals has increased, due to changes in society surrounding clinical care, moreover nursing education that considers the quality assurance of nurses is

---

1) 保健科学部看護学科 2) 保健科学部医療検査学科 3) KTU 大学研究開発センター 4) ライフサイエンス研究センター

desired. In particular, the educational environment for pediatric nursing is difficult to secure practice place and time to guarantee content, and guaranteeing the quality of nursing education is also difficult.

Meanwhile, the need for collaboration between clinical staff and educational faculty in nursing education has become apparent, and attention is being paid to the unification.

Therefore, at our university, we set up a clinical practice setting and conducted a practice with our graduates participating as clinical nurses.

In order to clarify the effect of clinical graduate participatory practices, a questionnaire survey was conducted with nursing students.

The network analysis showed that the graduates helped the students become familiar with nursing and the students were able to gain some degree of real-life clinical nursing experienced through the practices that motivated them.

Key words: graduates of our university, pediatric nursing practice, unification, cooperation

## 緒言

近年、医療を取り巻く社会の変化は著しく、少子高齢化、医療の高度化・複雑化、在院日数の短縮、在宅医療の拡大が進み、医療職者に求められるニーズは高まっている。その影響を受け、看護師は多様な患者のQOLを考慮した臨床（地）での実践能力を求められるようになった。

一方、「平成27年度文部科学省大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業報告書」（日本看護系大学協議会）<sup>1)</sup>によると、看護系大学の急激な増加の背景のなかで、看護教育の質の保証に関心が寄せられている。しかし、このような医療を取り巻く環境のなか、看護系大学における実習施設の確保の困難な状況が述べられている。特に小児看護学における実習病院の確保は著しく困難なうえ、実習時間の不足も述べられている。本学においても、小児看護学における実習病院の確保は困難を伴い、実習期間も短い。その状況のなか、患児の個別性を考えた看護計画を立案し、支援できるような

学生の看護実践力の育成には苦慮している。

他方、看護教育における実習病院すなわち臨床（実習病院、実習施設などを以下臨床と示す）と大学との協同や連携の必要性も先行研究では述べられており、臨床と教育のユニフィケーションが注目されている<sup>2)</sup>。ユニフィケーションとは、看護サービスと教育ならびに研究の責任を一つの管理組織に所属させることを意味し、1970年代にアメリカのいくつかの大学で取り入れられたものである<sup>3)</sup>。榎本ら<sup>4)</sup>によると、看護技術演習に看護師を演習補助者として導入することは、その演習補助者が重要なポイントを学生に教える過程で学生の思考や行動パターンをつかみ、この過程で得た「コツ」を使って学生を指導することができることに繋がっていると補助者に対する質問紙調査から分析していた。また、白坂ら<sup>5)</sup>の病院臨床教育看護師を加えた講義や演習指導による学生への効果に関する研究によると、学生は高い実践力を身につけた臨床教育看護師から熟練した技術、自分で判断することの重要性、子どもと家族への気遣い、看護師としての心のもち方などの学

びを得られたと述べていた。すなわち、臨床と教育機関が連携するユニフィケーションを取り入れた演習は、看護教育にとっては有効であると考えられる<sup>6)</sup>。しかし、上記の研究で演習に協力を依頼する看護師は、臨床から選ばれた臨床教育看護師や研修を終えた臨床指導者など、いわゆる熟練看護師である。また大学教育のなかでのユニフィケーションとして、臨床の師長や看護部長の講義も行われているがいずれも臨床の重責を担う看護師であり、学生にとっては遠い未来の目標の人たちである。

一方、大岡<sup>6)</sup>による卒業生と連携したキャリア教育開発の可能性と課題の検討を目的とした研究では、「学生にとって身近なロールモデルとなる可能性を持つ「同窓生」<sup>注1)</sup>に着目した結果、大学におけるセミナーや講演会に社会で活躍されているゲストスピーカーを迎えた場合、学生が大学時代の学びや研鑽の身近なロールモデルとするにはやや距離感がある」と述べている。また、学生による行動の模倣、規範の共有、価値観の伝播をスムーズに進めるにあたり、学生により「身近」と感じられるロールモデルとして「同窓生」を捉え、「同窓生」という人的資源を活用したキャリア開発は汎用性が高く、実践的・実学的高等教育の推進が期待できることが明らかになったと述べていた。加えて、黄<sup>7)</sup>によるとライフステージの一過程で「学校」という同じ組織に所属した同窓生は同じ学校文化に属するという一体感や親密感を保有するとも述べられていた。

そこで本学では上記の状況を踏まえ、臨床での実践を鑑みた学生への効果的な演習を行うため、昨年から実習病院の協力を得て、臨床看護師として働いている卒業生（以下卒業生と表示する）の参加を取り入れた演習を行っている。この演習を受けた学生からは、「臨床の実例を聞いて良かった」「先輩が丁寧に接してくれてわかりやすかった」などの肯定的な意見が得られたが、明確な効果は明らかでない。加えて、学生の教育場面で卒業生参加を取り入れた演習の影響や効果を明らかにした研究報告はほとんど見当たらなかった。

以上のことを踏まえ、本研究では卒業生の参加を

取り入れた演習が学生にどのような影響をもたらし、意義を見出せるのか明らかにしたいと考えた。

そして、上記にも述べているように卒業生が参加することが学生にとって意義があれば、いろいろな看護教育の場面での教育開発に応用でき、新たなユニフィケーションの一助になっていくのではないかと考える。

## 研究目的

卒業生の参加を取り入れた演習が学生にどのような影響をもたらし、意義を見出せるのか明らかにする。

## 研究方法

### 1. 研究方法

本研究は以下の演習について質問紙調査法を用いて調査し分析を行った。

#### 1) 演習内容

本研究の対象となった演習の概要を以下に示す。

本学小児看護学の講義2単位60時間の授業のなかの4時間をこの演習に使い、演習内容は小児看護の基本技術で、①輸液管理と点滴固定の技術（2時間）の演習と②急性期疾患の患児の事例を用いた学生の計画発表である。参加した卒業生は実習病院で働く看護師（看護経験は5～6年）である。卒業生は①の演習で、輸液ポンプの使用方法や輸液ポンプを使っている患児の実例を用いた観察ポイントを示し、②の演習では学生の発表を受けて臨床での実例を用い学生に助言を行った。

#### 2) 調査方法

##### (1) 調査対象

調査対象は、後期より小児看護学実習を履修する予定で、小児看護学の講義を受講している本学保健

科学部看護学科3年生83名とした。

## (2) 調査期間

調査期間は、平成29年6月～平成29年7月であった。

## (3) 調査方法

演習終了後、学生に書面と口頭で本研究の説明を行い、調査協力は自由意志で成績評価には影響しないこと、調査で得られた個人情報の保護を書面と口頭で説明した。同意を得られた学生から、全17項目からなる質問紙を配布し、回答した質問紙を所定の回収箱に無記名で投函する方法で行った。

## (4) 調査内容

質問紙は担当教員で協議を重ね、全17項目からなる独自の質問紙を作成した。質問内容は、以下のとおりである。

「Q1：演習前は、通常の演習に比べて積極的に予習した」

「Q2：演習前は、通常の演習に比べて演習に対する興味・関心が高まった」

「Q3：卒業生による説明は具体的で分かりやすかった」

「Q4：卒業生の説明により教科書にはない技術のコツを教えてもらった」

「Q5：卒業生の説明により臨床看護のイメージができた」

「Q6：卒業生から臨床の話聞くことで輸液に関する理解が深まった」

「Q7：輸液に関するケアの実施に伴うリスクへの理解が深まった」

「Q8：科学的根拠に基づいた技術の重要性を学んだ」

「Q9：今学んでいることが臨床でどのように役立つのかが分かった」

「Q10：現役の看護師ということでリアル感が増した」

「Q11：臨床を身近に感じて演習に取り組めた」

「Q12：後期からの実習に活かせると思った」

「Q13：後期からの実習に対する緊張感が和らい

だ」

「Q14：卒業生である現役の看護師が参加することで、看護師を身近に感じられた」

「Q15：演習内容が臨床に則しているため難しく感じた」

「Q16：実習病院で働いている看護師だったので緊張した」

「Q17：もっと経験の長い看護師（例えば病棟師長・主任）のほうが良いと思った」

全17項目の質問についてはいずれも、「思う」「やや思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の5段階での回答を求めた。

## 2. 解析方法

まず、全質問項目ごとに単純集計を行い、選択肢ごとの割合を算出した。データの関連を調べる方法としては、従来型のアソシエーション分析、クロス集計分析、因子分析、クラスター分析、ロジスティック回帰分析、線形回帰分析、主成分分析、独立性の検定などが存在し、近年急速に進歩を遂げているAI分野においては、機械学習やDeep Learningなどが存在している。また、近年のデータ量の急増により、データサイエンスという新領域も急速に拡大している。

従来、相関係数群を可視化しようとした場合、線形・非線形で次元削減した後に、スキャッタープロットを行い可視化するか、またはクラスタリング後に可視化を行うなどを行ってきた。次元削減で得られた(x,y)成分を可視化しようとした場合、x軸とy軸への意味づけが難しいという特徴がある。さらに、次元削減された場合、当然高次元の空間内の距離が削減されるため、情報量が失われることも考慮しなければならない。もし、グループ間の距離を求めたいような場合は、いわゆるクラスタリングを行う必要がある。クラスタリングも、部分集合に分割されたものが得られるだけであり、それを可視化する必要がある。例えば、階層的なクラスタリングを可視化する場合、生物学などで利用される系統樹や、

遺伝子発現解析で使われるヒートマップなどがあげられる。次元削減やクラスタリングによる可視化法では、その原理・方法を詳細に理解していなければ、可視化された図を見た場合、可視化された図から、意味を正確に理解することが非常に困難となってしまうという現状がある。

そこで今回、我々は、相関係数群の関係の可視化方法として、従来の次元削減後にスキャッタープロットを行う、またはクラスタリング後の可視化などは使用しない、ネットワークで表示する新たな解析方法 Visualization using Network with both parametric and non-parametric Correlation Coefficient (VNCC 法) を開発した。VNCC 法は次元削減とクラスタリングによる可視化ではなく、相関行列自体の中から、有意確率 (p 値) が有意水準よりも小さいものだけを、強い相関、相関がある、弱い相関に分類し、ネットワークを用いて可視化する新しい解析手法である。我々は、VNCC 法を利用することで、相関係数群の相互関係を、次元削減とクラスタリングによる可視化と異なり、直感的に理解することができるようになった。

具体的には、今回測定した項目のすべての組み合わせについて相関係数を算出した。2変量の相関解析は、2変数の両方が正規分布 (Normal distribution) に従っているかどうかによって手法が異なる。

そこでまず、すべての測定項目に対して正規分布性の検定を行うことで各項目が正規分布に従っているか確認した。正規分布性検定は、標本サイズが2,000以下のときは Shapiro-Wilk の検定を、標本サイズが2,000より大きいときは KSL (Kolmogorov-Smirnov Lilliefors) の検定が行われる。本研究では、すべての測定項目の標本サイズが64で2,000以下のため、正規性の適合度検定として Shapiro-Wilk の検定を行った。

そして上記の結果を踏まえ、まず、測定項目が両方も正規分布の項目の場合はパラメトリック解析の Pearson の相関係数 ( $r$ ) を、正規分布ではない場合はノンパラメトリック解析の Spearman の順

位相関係数 ( $\rho$ ) を算出した。次に、測定項目間の関連を可視化するために、算出した相関係数からネットワーク解析を行った。

なお、統計解析には JMP 13 (SAS Institute Inc.) を、また、ネットワーク解析には Cytoscape 3.5.1 (オープンソース)<sup>6)</sup> を使用し、有意水準は5%とした。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、神戸常盤大学研究倫理委員会の承認を得て実施した (第17-08号)。本研究について、学生に口頭と文書で研究の趣旨および概要、研究目的、研究方法、質問紙の内容について説明し、加えて研究参加・辞退の自由、辞退した場合に不利益が生じないこと、プライバシーの保護並びに個人情報の遵守、データの匿名と管理方法、研究結果の公表について説明した。学生の質問紙記載の文書の投函をもって同意とした。

## 結果

### 1. 解析対象データ数

質問紙を投函した者は81名であった。そのうち1名については、記載がない項目があるため解析対象から外し、最終的な解析対象数は80名となった。

### 2. 解析結果

#### 1) 全質問項目の単純集計

以下、全17項目ごとに、単純集計の結果を示す(図1)。

「Q1: 演習前は、通常の演習に比べて積極的に予習した」

この質問に対しては、「思う」が21名(26.2%)、「やや思う」が45名(56.2%)で、82.4%の学生がそう思っていた。

「Q2: 演習前は、通常の演習に比べて演習に対する興味・関心が高まった」

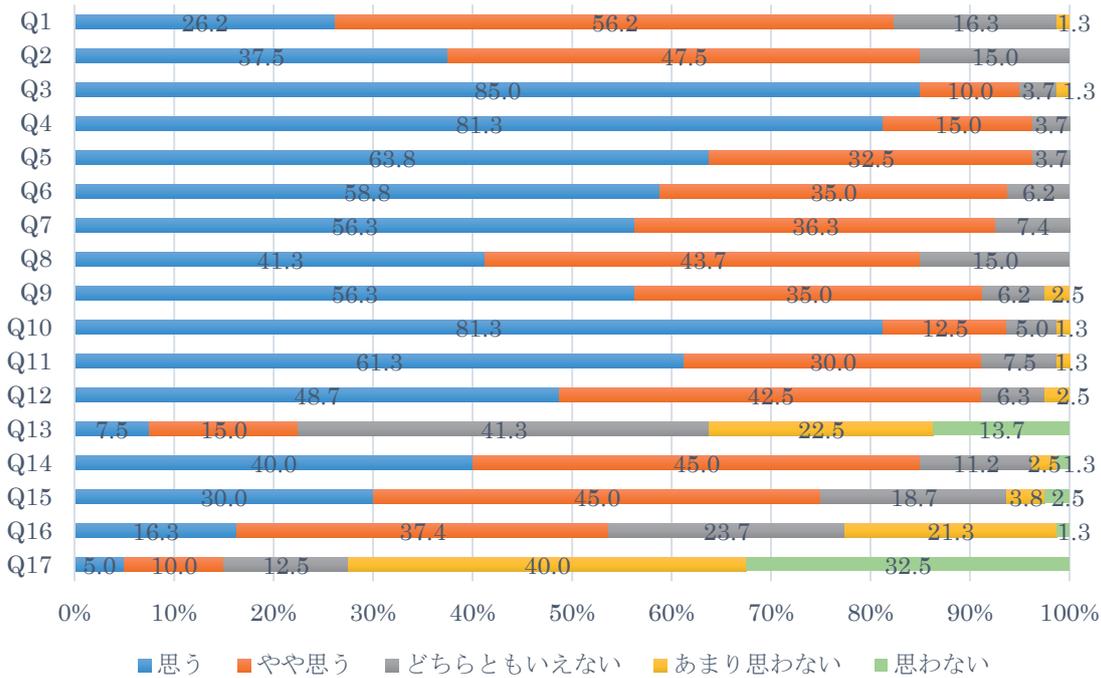


図1 全質問項目 (Q1~Q17) ごとの回答割合

この質問に対しては、「思う」が30名(37.5%)、「やや思う」が38名(47.5%)で、85.0%の学生がそう思っていた。

「Q3：卒業生による説明は具体的で分かりやすかった」

この質問に対しては、「思う」が68名(85.0%)、「やや思う」が8名(10.0%)で、95.0%の学生がそう思っていた。

「Q4：卒業生の説明により教科書にはない技術のコツを教えてもらった」

この質問に対しては、「思う」が65名(81.3%)、「やや思う」が12名(15.0%)で、96.3%の学生がそう思っていた。

「Q5：卒業生の説明により臨床看護のイメージができた」

この質問に対しては、「思う」が51名(63.8%)、「やや思う」が26名(32.5%)で、96.3%の学生がそう思っていた。

「Q6：卒業生から臨床の話聞くことで輸液に関する理解が深まった」

この質問に対しては、「思う」が47名(58.8%)、「やや思う」が28名(35.0%)で、93.8%の学生がそう思っていた。

「Q7：輸液に関するケアの実施に伴うリスクへの理解が深まった」

この質問に対しては、「思う」が45名(56.3%)、「やや思う」が29名(36.3%)で、92.6%の学生がそう思っていた。

「Q8：科学的根拠に基づいた技術の重要性を学んだ」

この質問に対しては、「思う」が33名(41.3%)、「やや思う」が35名(43.7%)で、85.0%の学生がそう思っていた。

「Q9：今学んでいることが臨床でどのように役立つのかが分かった」

この質問に対しては、「思う」が45名(56.3%)、「やや思う」が28名(35.0%)で、91.3%の学生がそう思っていた。

「Q10：現役の看護師ということでリアル感が増した」

この質問に対しては、「思う」が65名(81.3%)、「や

や思う」が10名(12.5%)で、93.8%の学生がそう思っていた。

「Q11：臨床を身近に感じて演習に取り組めた」

この質問に対しては、「思う」が49名(61.3%)、「やや思う」が24名(30.0%)で、91.3%の学生がそう思っていた。

「Q12：後期からの実習に活かせると思った」

この質問に対しては、「思う」が39名(48.7%)、「やや思う」が34名(42.5%)で、91.2%の学生がそう思っていた。

「Q13：後期からの実習に対する緊張感が和らいだ」

この質問に対しては、「どちらともいえない」が33名(41.3%)で最も多く、「あまり思わない」が18名(22.5%)、「思わない」が11名(13.7%)で、36.2%の学生がそう思っていなかった。

「Q14：卒業生である現役の看護師が参加することで、看護師を身近に感じられた」

この質問に対しては、「思う」が32名(40.0%)、「やや思う」が36名(45.0%)で、85.0%の学生がそう思っていた。

「Q15：演習内容が臨床に則しているため難しく感じた」

この質問に対しては、「思う」が24名(30.0%)、「やや思う」が36名(45.0%)で、75.0%の学生がそう思っていた。

「Q16：実習病院で働いている看護師だったので緊張した」

この質問に対しては、「どちらともいえない」が19名(23.7%)で最も多く、「あまり思わない」が17名(21.3%)、「思わない」が1名(1.3%)で、22.6%の学生がそう思っていなかった。

「Q17：もっと経験の長い看護師(例えば病棟師長・主任)のほうが良いと思った」

この質問に対しては、「あまり思わない」が32名(40.0%)、「思わない」が26名(32.5%)で、72.5%の学生がそう思っていなかった。

## 2) 相関係数とネットワーク解析

### (1) 各質問項目間の相関係数

正規性の適合度検定としてShapiro-Wilkの検定を行った結果、全17項目とも正規分布に従っていなかったため、Spearmanの順位相関係数を算出した(表1)。

このうち、有意確率が有意水準の5%よりも低かった項目の組み合わせは、全部で91通りあった。ここで、Spearmanの順位相関係数( $\rho$ )が0.6以上のものを強い相関がある、0.5~0.6のものを相関がある、0.4~0.5を弱い相関があるとした。

その結果、強い相関があったのは、Q3とQ4( $\rho = 0.639$ ,  $p < 0.001$ )、Q5とQ10( $\rho = 0.613$ ,  $p < 0.001$ )の2通りであった。

相関があったものは、Q1とQ2( $\rho = 0.592$ ,  $p < 0.001$ )、Q10とQ11( $\rho = 0.582$ ,  $p < 0.001$ )、Q5とQ6( $\rho = 0.575$ ,  $p < 0.001$ )、Q8とQ9( $\rho = 0.555$ ,  $p < 0.001$ )、Q7とQ12( $\rho = 0.533$ ,  $p < 0.001$ )、Q8とQ12( $\rho = 0.513$ ,  $p < 0.001$ )、Q4とQ9( $\rho = 0.512$ ,  $p < 0.001$ )、Q6とQ7( $\rho = 0.511$ ,  $p < 0.001$ )、Q4とQ12( $\rho = 0.511$ ,  $p < 0.001$ )の9通りであった。

弱い相関があったものは、Q9とQ11( $\rho = 0.497$ ,  $p < 0.001$ )、Q9とQ12( $\rho = 0.495$ ,  $p < 0.001$ )、Q7とQ8( $\rho = 0.482$ ,  $p < 0.001$ )、Q6とQ8( $\rho = 0.476$ ,  $p < 0.001$ )、Q1とQ12( $\rho = 0.457$ ,  $p < 0.001$ )、Q4QとQ10( $\rho = 0.456$ ,  $p < 0.001$ )、Q3とQ10( $\rho = 0.446$ ,  $p < 0.001$ )、Q12とQ14( $\rho = 0.444$ ,  $p < 0.001$ )、Q2とQ14( $\rho = 0.430$ ,  $p < 0.001$ )、Q2とQ4( $\rho = 0.430$ ,  $p < 0.001$ )、Q2とQ9( $\rho = 0.429$ ,  $p < 0.001$ )、Q6とQ12( $\rho = 0.425$ ,  $p < 0.001$ )、Q7とQ9( $\rho = 0.419$ ,  $p < 0.001$ )、Q1とQ14( $\rho = 0.415$ ,  $p < 0.001$ )、Q11とQ12( $\rho = 0.415$ ,  $p < 0.001$ )、Q5とQ7( $\rho = 0.412$ ,  $p < 0.001$ )、Q1とQ7( $\rho = 0.410$ ,  $p < 0.001$ )、Q4とQ7( $\rho = 0.408$ ,  $p < 0.001$ )、Q15とQ16( $\rho = 0.404$ ,  $p < 0.001$ )、Q6とQ9( $\rho = 0.403$ ,  $p < 0.001$ )、Q5とQ11( $\rho = 0.400$ ,  $p < 0.001$ )の21通りであった。

ただし、これらの相関は、すべて正の相関であり、負の相関は存在しなかった。

表 1 全質問項目 (Q1~Q17) 間の相関係数

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17
Q1	1.000																
Q2	0.592***	1.000															
Q3	0.218	0.293**	1.000														
Q4	0.267*	0.430***	0.639***	1.000													
Q5	0.255*	0.179	0.393***	0.309**	1.000												
Q6	0.240*	0.203	0.330**	0.357***	0.575***	1.000											
Q7	0.410***	0.210	0.303**	0.408***	0.412***	0.511***	1.000										
Q8	0.358***	0.191	0.338**	0.397***	0.398***	0.476***	0.482***	1.000									
Q9	0.312***	0.429***	0.397***	0.512***	0.313**	0.403***	0.419***	0.555***	1.000								
Q10	0.283**	0.306**	0.446***	0.456***	0.613***	0.350**	0.328**	0.322**	0.393***	1.000							
Q11	0.172	0.375***	0.352**	0.336***	0.400***	0.356**	0.347**	0.383**	0.497***	0.582***	1.000						
Q12	0.457***	0.3333***	0.300*	0.511***	0.304**	0.425***	0.533***	0.5133***	0.495***	0.319**	0.415***	1.000					
Q13	0.012	0.144	-0.065	0.033	-0.001	0.085	0.071	0.203	0.163	0.053	0.084	0.272*	1.000				
Q14	0.415***	0.430***	0.314**	0.331**	0.354**	0.377***	0.349**	0.262*	0.277*	0.367***	0.348**	0.444***	0.267*	1.000			
Q15	0.374***	0.350**	0.046	0.281*	-0.014	0.120	0.177	0.230*	0.236*	0.140	0.173	0.261*	0.336**	0.333**	1.000		
Q16	0.313***	0.171	0.056	0.169	0.179	0.075	0.311**	0.217	0.211	0.312**	0.116	0.344**	0.27*	0.282*	0.404***	1.000	
Q17	-0.187	-0.105	-0.149	-0.232*	-0.038	0.026	-0.179	-0.135	-0.130	-0.128	-0.129	-0.198	0.106	-0.093	-0.142	-0.126	1.000

\*P<0.05 \*\*P<0.01 \*\*\*P<0.001

(2) 項目間の関係の可視化

上記(1)で得られた2項目間の相関係数を用いて、各項目間がどのような関係にあるのかを可視化するためのネットワーク解析の結果が図2である。図2は、ノード(円)が項目を示し、エッジ(線)が相関を表している。エッジには、3種類の太さがあり、太い方からそれぞれ、強い正の相関、正の相関、弱い正の相関を表している。

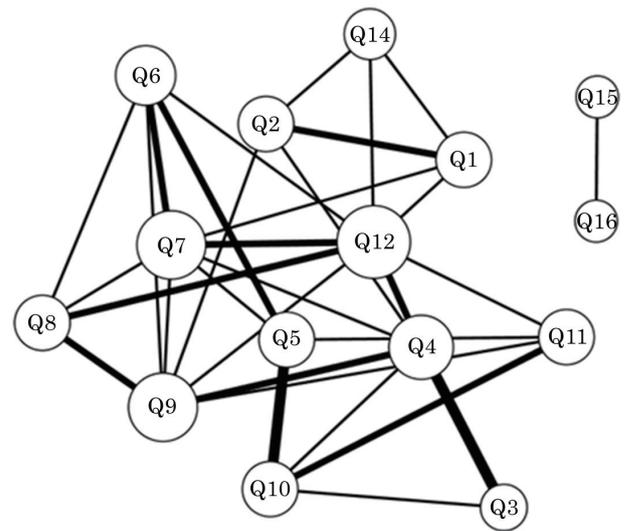


図2 全質問項目 (Q1~Q17) 間のネットワーク解析結果

考察

ネットワーク解析の結果、全質問項目が2つのグループに分割された。

1つ目のグループは、Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6、Q7、Q8、Q9、Q10、Q11、Q12、Q14から構成される13項目からなるグループである。このなかでも、Q12は次数が最も多く8であった。これは、この「Q12：後期からの実習に活かせると思った」がこの質問紙のなかでも、「演習」と「実習」

の関係性を密に問うている質問であり、このQ12への相関の次数が多く中心に位置する存在であるということは、すなわち「演習」と「実習」の色々な側面において中核となる相関関係を示しているのではないかと考える。また、図2のネットワークのエ

ッジ（線）の太さはその相関の強さを表していることから、「Q5：卒業生の説明により臨床看護のイメージができた」と「Q10：現役の看護師ということでリアル感が増した」「Q6：卒業生から臨床の話を書くことで輸液に関する理解が深まった」は相関関係が強く、実習に対してリアルな感覚を養うことに繋がっていると考えられる。また、卒業生の参加に関する質問「Q3：卒業生による説明は具体的で分かりやすかった」「Q4：卒業生の説明により教科書にはない技術のコツを教えてもらった」についてはエッジ（線）の太さが太く強い関係性を示している。加えて単純集計においても、「思う」がどちらも80%以上を示し、「やや思う」を加えれば95%を優に超える結果が出ており、学生は卒業生が加わることで臨床と結び付けて考え、臨床への関心や臨床で使う技術への興味を深めていると考えられる。「Q5：卒業生の説明により臨床看護のイメージができた」「Q10：現役の看護師ということでリアル感が増した」「Q11：臨床を身近に感じて演習に取り組めた」「Q12：後期からの実習に活かせると思った」も密な関係性を示し、「Q5：卒業生の説明により臨床看護のイメージができた」と「Q6：卒業生から臨床の話を書くことで輸液に関する理解が深まった」「Q10：現役の看護師ということでリアル感が増した」も相関を示していた。これらのことから、卒業生が演習に参加することで学生はリアルな感覚をもって演習に参加でき、実習に対する動機づけ（motivation）に繋がったと考える。

一方、卒業生が参加したことの学生へ及ぼす影響については、「Q14：卒業生である現役の看護師が参加することで、看護師を身近に感じられた」の単純集計結果では、「思う」「やや思う」を合わせて85%の学生が身近に感じていることが示されていた。他方、「Q17：もっと経験の長い看護師（例えば病棟師長・主任）のほうが良いと思った」の結果では、「思わない」「あまり思わない」を合わせて72.5%の学生が答えていることから、看護師が参加することに重きを置き、経験年数にこだわっていないことが伺われる。

しかし、「Q13：後期からの実習に対する緊張感が和らいだ」と「Q17：もっと経験の長い看護師（例えば病棟師長・主任）のほうが良いと思った」については、これらのネットワークには現れることはなかった。これは、Q13は単純集計の分布は、図1にも示されているように何かを表すような偏りはなかったことや、「Q12：後期からの実習に活かせると思った」のような「実習」と「演習」に繋がるものにはならなかった。また、Q17に関しては、どの項目とも全く相関関係が認められなかった。これは、Q17がこれ以外の質問項目とはかけ離れた項目になっていたため、他の項目との関係性は見出せなかったためだと考えられる。

そして、2つ目のグループはQ15とQ16の2項目のみからなるグループであり、その他のグループとは異なることが明らかとなった。これは、「Q15：演習内容が臨床に則しているため難しく感じた」および「Q16：実習病院で働いている看護師だったので緊張した」というように、他の15の肯定的な質問（Positive question）と違いどちらも否定的な質問（Negative question）であるため、グループが異なったということが考えられる。

以上のことから、今回の演習において卒業生の役割は大きく、学生に臨床の実際に迫るリアルな感覚を与え実習に向かった動機づけになっていたと考えられる。たとえ教員が講義中に看護の実際の経験を学生に話しても、このような卒業生が与えるリアルな感覚には及ばず、実習への動機づけにおいても薄く、卒業生の参加を取り入れた演習は学生にとって意味深いと考える。

Yardimciら<sup>9)</sup>によると動機づけは教育の場面において学ぶこと、成績、好奇心や継続と深い関係があると述べている。そしてこの動機づけは内的動機づけ（internal motivation）と外的動機づけ（external motivation）があり、外的動機づけの支援がないと内的動機づけの継続は難しくなるともいわれている。すなわち、看護学生は“看護師になる”という目標が明確であるため内的動機づけをもって入学してくるが、大学での4年の間に“看護師

になる”という動機づけを継続できるように外的動機づけを支援していくことが重要であると述べている。外的動機づけとは、これから看護師を目指す学生の職業に対する自信をもたらしたり、目標を持ち続けるきっかけになりうる事象や体験だったり、臨床に臨む好奇心を揺さぶる事象や体験である。しかし、学生は質問紙にも表れているように実習に不安があり自信もあまり持てないと考えられる。そこで身近な卒業生が臨床の様子や患児の話を取り入れ学生に関わって助言したり、指導に加わったりすることは、実習に臨む学生の不安を軽減し、実習に対して期待や楽しみを持てるのではないだろうかと考える。また、黄によると大学教育の活性化、学資力向上のために「同窓生」メンター<sup>注2)</sup>の存在は大学教育における重要な人的資源であると述べている。たとえば「同窓生」メンターは学生にとって同じ大学で共通の経験をしたことによる親密性を感じ、「同窓生」も学生に対して本音で語ったり、学生も真剣にそれを受け止めたりすることがある。このことは本研究の卒業生と学生間にも同じ感覚があり、卒業生が学生にとっての身近な看護師像になっているのではないかと考える。そしてこの体験が内に秘めていた”看護師になる“という内的動機づけを思い起こし継続するための外的動機づけになるのではないかと考える。今回のような卒業生の参加を取り入れた演習は、これから病院の実習に臨む学生にとって意義があることは見いだせたが、臨床と教育の乖離を解消し看護教育と臨床との懸け橋になるためには、卒業生の参加を取り入れた演習の効果を明らかにする研究を進めていく必要がある。そして、学生の看護教育に意義があるだけでなく、参加した卒業生にとっても意義があり臨床看護の質の向上に繋がるようなユニフィケーションを目指した効果的な演習の方法を探る研究が必要であると考えられる。

## 結論

本研究の結果、学生は卒業生が参加することで看護師を身近に感じ、臨床看護のイメージがついたり、指導のなかで臨床との違いを体験したり、実習への動機づけになっていたことが明らかになった。

## 本研究の限界と今後の課題

今回の質問紙調査からは臨床で働く現役看護師である卒業生が演習に参加することの意義は見出せた。しかし、卒業生が参加していない教員だけの演習との比較、あるいは卒業生ではない看護師が参加した演習との比較ができていないため、本演習のように卒業生が参加する演習が、他の演習方法に比べより効果があるかどうかは明らかにできていない。また本演習が、実習前の学生たちの動機づけ(motivation)に繋げることはできても、それが実習における学修効果に繋がるかどうか明らかにはできていない。これらの点を今後の課題としたい。

## 注

注1) 同窓生とは同じ学校で、又は同じ師について学んだ卒業生のことを指す

注2) メンタリング(mentoring)とは助言者であるメンター(mentor)が、それを求めるメンティ(mentee)と基本的に1対1の関係をとおして継続的な交流を行う活動を示す。メンターはメンティと信頼を構築し、役割モデルを提供し、発達・成熟支援を行う。

## 文献

- 1) 日本看護系大学協議会. “平成27年度文部科学省大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業報告書”. <http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2015/12/H27MEXTProject.pdf>, (参照2017-9-1)
- 2) 市村久美子, 旭佐記子, 高村祐子, 吉川三枝子. 茨城県立医療大学と附属病院のユニフィケーションの取り組み. *Nursing BUSINESS*. 2011, 5, 6, 501-506.
- 3) 高田法子, 平岡敬子. ユニフィケーションモデル (Unification Model) の検討～臨床と大学の連携と共同の可能性～. *看護学統合研究*. 2001, 2, 2, 1-8.
- 4) 榎本康世, 富岡由美, 三田村友美. 臨床指導者が学内技術演習に参加することの意味～ユニフィケーション活動を通して～. 第37回看護学会論文集 (看護教育). 2006, 191-193.
- 5) 白坂真紀, 小野幸子, 桑田弘美. 小児看護学演習における看護学生の学び～滋賀医科大学付属病院臨床教育看護師の指導を受けて～. *滋賀医科大学看護学ジャーナル*. 2014, 12, 1, 31-34.
- 6) 大岡栄美. 関西学院同窓生と連携したグローバルキャリア教育の開発. *関西学院大学高等教育研究*. 2016, 6, 17-21.
- 7) 黄順姫. 同窓生と地域住民の連携による大学教育の活性化: アクションリサーチによる事例を中心に. *社会学ジャーナル*. 2015, 40, 43-78.
- 8) 松田麗子, 大谷かかり, 堀井直子, 杉田豊子, 荒川尚子, 近藤暁子, 江尻晴美, 梅田奈歩, 中山奈津紀, 牧野典子. 成人看護学演習における演習補助者との連携教育～テキストマイニングソフトを用いた演習補助者のアンケート分析から～. *生命健康科学研究所紀要*. 2011, 121-125.
- 9) Shannon, P., Markiel, A., Ozier, O., Baliga, N. S., Wang, J. T., Ramage, D., Amin, N., Schwikowski, B., Ideker, T. Cytoscape: a software environment for integrated models of biomolecular interaction networks. *Genome Res*. 2003, 13, 11, 2498-2504.
- 10) Yardimci, F., Bektaş M., Özkütük, N., Muslu, G. K., Gerçeker, G. Ö., Başbakkal, Z. A study of the relationship between the study process, motivation resources, and motivation problems of nursing students in different education systems. *Nurse Education Today*. 2017, 48, 13-18.

